6. 長期X線経過を観察し得た低リン血症性くる病の1例

○湯山　琢夫，井上駿一，後藤澄雄
小沢　俊之，森川嗣夫　（千大）
霜　礼次郎　（霜整外）
栗原　真　（川鉄整外）

1歳時より13年間にわたってX線経過を観察し得た低リン血症性くる病の1例を報告する。本例は1歳時からビタミンDを投与されていたが，7歳頃よりコントロール不能となり14歳でO脚変形矯正手術を施した例である。本例のX線像を検討することにより，骨の横方向への成長が変形に大きく影響していることを示す。また文献的に，低リン血症性くる病における下脚変形の矯正手術の時期について検討する。

7. 低リン血症性 VitD 抵抗性骨軟化症の1治験例

○山岡昭義，大木健資，音琴　勝
李　元浩，平山景大
（君津中央）
後藤澄雄　（千大）

活性型ビタミンD投与により，著明な臨床症状の改善をみた原発性低燐酸血症性骨軟化症の症例を経験した。症例は31歳女性，股関節痛，腰痛，膝関節痛，筋力低下を主訴とした。諸検査の結果，腎尿細管における燐酸塩の保持能の低下を特徴とする原発性低燐酸血症性骨軟化症と診断し，活性型 V.D を最高30μg/day まで増量した結果，血清 Ca，P 値は改善されないのに，臨床上の改善は著しかった。これは活性型 V.D の骨直接作用と考えられた。

8. Blount 氏病の2症例

○長沢謙次，勝呂　徹，守屋秀繁
（千大）

我々が最近経験した2例の Blount 氏病について報告した。症例1は，5歳女性で両側膝蓋骨習慣性亜脱臼に合併するもの，症例2は，2歳男性で FTA 右205°左215°と著明なO脚を示すものであった。診断は，検査値の異常のないこと，レ線の継続的な観察によって，くる病をはじめ他のO脚をきたす疾患を否定し行った。治療は Langenskiold の分類にそって，それぞれ dome 型 osteotomy を行い，良好な結果を得，現在外来にて follow を継続している。

9. 10歳児に見られた若年性腰椎椎間板ヘルニアの1治験例

○道永幸治，松井宣夫，三枝　修
蔣　益隆，高山篤也　（千大）

文献的に本邦で最年少と思われる，10歳女児の若年性腰椎推間板ヘルニアの一治験例を報告した。症例は，脊柱変形と右大腿外側部痛を主訴とし，Hamstring tightness が認められた。ミエログラフィー及びディスコ CT で $L_{5\text{-}6}$ 間右側のヘルニアが疑われ，Love 法にて同部のヘルニアを確認，摘出した。術後6カ月を経た現在，右大腿外側部痛，Hamstring tightness は消失した。

10. 同時2方向X線撮影による脊柱の3次元座標解析

○山懸正庸，高橋和久（千大）
玉木　保　（日本工業大学）

脊柱変形の3次元的形状解析を行なう目的で同時2方向X線撮影による脊柱の形状解析装置を開発し臨床応用を試みた。基準フレームの中の患者に対して斜め45°方向から2方向X線撮影を行ない，得られた2枚のX線像をマグネスケールにて座標化し，更にマイクロコンピューターにて3次元座標を算出させるものである。X線像のプロットが困難な例があるが，装置自体の精度は高く臨床応用に際して極めて有用であると思われた。

11. 関節内 Steroid 注入治療前後における OA 関節液中 PG の動態について

○蔣　益隆（千大）
東山　義龍
（県立千葉リハビリテーションセンター）

グアニジン塩酸を用いた塩化セシウム密度勾配遠心法を用い，ステロイド注入前後変形性膝関節症関節液中のプロテォグリカンの動態をしらべた。結果：1. 注入前の OA 関節液は注入後より PG non-aggregate 含有量が多く，注入後の OA 関節液は注入前より PG aggregate が多かった。2. Proteoglycan Subunit 画分を0.1 M Pyridin 0.4M ギ酸緩衝液で泳動した結果，ステロイド注入後関節液のヒアルロン酸 spot は注入前より大である(62.88%対37.11%)。これに対し，コントロイチン硫酸の spot 注入後より注入前の方が大である(32.64%対67.35%)。